

別国和解吗？ 与他国和解对于日本又有何种意义呢？

11

“国際セミナー「南京を思い起こす 2009」” を振り返って

匿名

今回のセミナーに参加する前の日本にいたとき、私の中には、未知の世界で何かを得たいという期待と、私のような勉強不足なものが行っても大丈夫なのかという不安があった。今、セミナーを終え再び日本に帰ってきてみると、私の中には、その不安とは裏腹に安らかな気持ちが続いている。私がこのような気持ちになれたのは、日本と中国にとって歴史的に大きな意味をもつ南京大虐殺があった地に訪れ、その地でワークを行い、その中で中国の方々との交流をするという体験ができたからだと思う。さらに、そのワークの中でアルマンドが私たちのこころの扉をやさしく開いてくれたからだと思う。

私にとって今回のセミナーで得られたことは、まず、南京大虐殺という日本と中国にとっての大きな傷跡を見つめることができたことである。これまで、私は、この歴史事実から目を背けていた。これまであまり詳しく教えてもらうことがなかったということもあるが、自分からどのような悲惨な出来事があったのかを知ろうとしなかった。けれども、私自身が日本人として生きていく限り、この事実からは目を離すことはできない。このような残虐性を秘めた私であることを自ら自覚していく必要がある。そのためには、過去の悲惨な出来事を覆い隠すのではなく、しっかりと見つめていかなければならないと感じた。

次に、中国の方たちとの交流ができたということも、私にとって大きな収穫であった。今回のセミナーでは、中国という地で、中国の方と互いを理解し合えるような時間を多くもてた。このように、中国の方たちと歴史的な事実を踏まえた上で、人間同士としての交流をもてたことは、私自身の中に新たな広がりが出てきたように思う。日本にいたままで、中国の方は日本を恨んでいるに違いないという勝手な思い込みのままでいると、私の中にこのような広がりとは生ま

れなかった。これから、この経験を活かし、自分の殻に閉じこもらず、自分を開き他者とのつながりをもつ機会を増やしていきたいと思うようになった。これは、心理臨床を学ぶ私にとって、心理臨床の理解を深められる機会になったのではないかとも思われる。それは、臨床の中の「臨」についての理解が深まったように感じたからである。今回のセミナーでは、未知の世界である南京という「場所・地」に臨むことができ、また「中国の人々」に臨むこともできた。それらを観察しそれらに触れ、それらとの関係を結ぶことができた。このように、まさに「臨機応変」な対応ができたのは心理臨床の専門家を目指す私にとって大きな成果であったと思われる。

今回、南京の地を訪れている時、私の中で過去にサラリーマンをしていた時の記憶が蘇ってきた。私は民間企業で働いている時、銀行のATMの開発に携わっていた。入社当時は、需要が多く儲かっていた。しかし、どこの銀行にもATMがいきなり売り上げが落ち込むようになっていった。その時、ATMにちょっと手を加え消費者金融向けの自動支払機を開発することになった。私の会社では誰もが疑わずサラ金向けの機械を開発した。しかし、その時、私は自分のやっていることに疑問を感じた。自分は企業利益を考え機械を作っているが、実は、その機械が出回ることによって、世の中では借金に苦しむ人が増えるのではないか。それにより自殺を考えている人も増えているのではないか、そんな疑問が浮かんできた。その話を同僚にしてみたが、誰もそのことには触れたくないようだった。私は、このことだけが理由ではないが、これも理由の一つとして企業を辞めることにした。私の話は南京虐殺に比べると取るに足らない小さな話である。けれども、私の中では、このサラリーマン時代の私と南京虐殺を行った当時の日本兵の姿とがだぶってしまった。当時の日本兵の多くは国家のためと思いただ戦っていたに違いない。そして、現在の私たちの中にも企業のためと思い企業戦士としてただ戦っている人々が多くいる。食品偽装をしている戦士たち、武器の部品を作っている戦士たち、借金の取り立てをしている戦士たち……。私はこんなことはやりたくないと思って企業を辞めたが、現在の企業戦士の中には辞めたいと思いながらも企業のため家族のためを思い戦いを続けている者たちが多くいる。戦いは終わっていない。戦いの中で心を病み倒れていく者たちも多くいる。戦いのない理想の社会はいつになったら訪れ

のだろうか。ちょっと飛躍した話であるが、南京でそんなことも考えた。このようなことを考えていくのも私にとっての今後の課題かなと思うようになった。

今回のセミナーでは、限られた予算の中でこれだけ多くの収穫を得させて頂けたことは、とても有難いことであった。この経験を今後につなげていけるよう、これからも努力していきたいと感じている。

ほんとうに、ありがとうございました！！

回顾国际研讨会「回忆南京 2009」

匿名

当我在日本，尚未来南京参加本次研讨会时，心中非常期待能从这从未涉及过的领域中有所收获，同时也忐忑不安。担心自己因学习不充分而做不好。

而如今，研讨会顺利结束，我又重新回到日本。此时，感到以前那种不安已荡然无存，身心充盈着安详。之所以有如此心境，是因为我访问了对中日两国有着非同寻常历史意义的南京——一座曾经发生大屠杀的城市。在那儿参与了工作坊活动，并活动期间，体验到了与许多中国人交流的感受；同时，阿尔曼德先生亲切地让我们敞开了心扉。

在本次研讨会中，首先，我能够正视南京大屠杀这个事件了，这是深深印刻在中日人民心中的巨大伤痕。而至今为止，我从未敢看这个历史事实。虽然，关于这个事件，没有人详细告诉过我们，自己也无从得知这个事件到底有多凄惨。但是，既然我身为日本人，就无法摆脱与该事件的关系，必须认识到那种残忍性也隐遁在我的潜意识中。为此，我感到必须直面过去的残酷事实，而不是极力掩饰。

第二个收获是，能够与许多中国人交流了。对我来说这是巨大的收获。在中国举办的本次研讨会中，我们得到了很多彼此得以互相理解的交流时间。能够和中国一起面对历史事实，彼此进行人与人的交流，使我内心涌动出一种全新的感受。在没去中国之前，我一直认定中国人对日本人是恨之入骨的，那时完全没有现在这种感受。

今后，我一定通过这次体验，不再封闭自己，敞开自己的心扉，增加与别人交流和联系的机会。我是学习临床心理学的，对我来说，获得这种感受的机会，